

著者松谷氏は、1980年代前半から2012年までの約30年間の女子のコミュニケーション、社会学の視点から、「ギャル」

ル対不思議ちゃん」という構図で描き出す。「ギャル」は、コギャル、アムラー、ガングロ、aBe嬢であり、

「不思議ちゃん」は、ナゴムギャル、シノラー、裏原宿系である。

ギャルと不思議ちゃんは、時に強く意識し合い、独自性を確認しようとして戦ってきた。ギャルは不思議ちゃんという少数派を「変だよね」と言い合うことによって同化圧力を維持し、不思議ちゃんはギャルという多数派を「つまらない人たち」と評することによって、自分たちの「存在確認」をしようとしてきた。

このような女子特有の対立構造は、学校の中にも見られよう。DeSeCo[※]のいう「異質な集団

松谷創一郎 著

2310円 原書房
☎03-3354-0374



ギャルと不思議ちゃん論 女の子たちの三十年戦争

で交流する」というキー・コンピテンシーの育成も簡単にはいかない。

だが、終章において、きやりーばみゅばみゅの分析に至る時、この対立構造の鮮明さに、やや陰りが生ずる。彼女の奇抜なファッション、ブログでの「変顔」などは、「主流派に対する差異化として、つまり不思議ちゃんとして機能」している。しかし、

「多元的な自己を操って生きる若者たち」にあって、多数派の渋谷系に対する少数派としての彼女の原宿系ファッションを、交友に合わせて選択することは「不思議」ではない。

現代青年のこのような「多元的自己」は、「存在確認」というより「存在戦略」と捉えられる。だとすれば、われわれも、これを上手に誘導し、彼らが同化圧力を乗り越え、異質の他者と交流して、より良い「存在確認」ができるよう、戦略を立て直すべきといえよう。

(聖徳大学教授・西村美東士)